

米欧亜回覧

第79号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

七月全体例会は、芳賀徹先生の講演！ 「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」について

今回は、二十周年記念事業のテーマの一つ「岩倉使節団の総括」にそって、芳賀徹先生にご講演をいただくことになった。芳賀先生は、「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」に関して、もっとも早くから注目して著作も発表し、当会についても設立以前からいろいろご教示を戴いている特別顧問というべき碩学である。

ご承知のように「明治維新と日本人」の著書で岩倉使節団を扱い、NHKの教育番組では「米欧回覧実記」を取りあげられた。そして、当会の設立五周年記念行事でも十周年記念事



4月全体例会（泉代表の説明）

業でもモデレーターやアドヴァイザー役を引き受けてくださった先生である。

今回はその意味で、現下の当会にとつて最適の講師をお願いしたことになる。みなさん、ふるつてご参加をいただきたい。なお、先生は懇親会にもご出席くださる予定である。

設立二十周年記念行事の企画、各プログラムの準備的ミーティングや勉強会進行中！

四月の全体例会では、当号二頁にも掲載の通り（「企画趣意書案」資料送付済み）、全体の企画、基本方針について泉代表より提示があり、それに沿ってその後それぞれのプログラムについて準備的なミーティングやプレセミナーが進められている。テーマが大きいだけに、どれだけ具体化できるか、目下各グループで模索中の段階といえる。

まず、五月からはセミナーBによる「日本近代セミナー百五十年の歴史」（明治編）が、山

田哲司氏を中心に開催され、七月末までに十回シリーズを終え、以後、大正・昭和前期、戦後昭和平成をそれぞれシリーズで進行の予定。セミナーAは小野氏を中心に六月に企画ミーティングが行われ、七月から「岩倉使節団の総括」をテーマにスタートする運びになった。また、グローバルジャパン研究会では「現下日本の課題」に関する提言的内容をどう全体の企画に盛り込んでいくかについて、畠山氏を中心に七月にミーティングを行い、九月から勉強会をスタートする予定になっている。

また、もう一つの重要な柱であるアーカイブ・ミュージアム構想については、小野氏の精力的な「岩倉使節団関連の人物列伝」の作業が進められ、その他にも有志より資料集めやコンテンツが次々と積み重ねられている。したがって七月の幹事会では、「委員会」の中山、政井、吉原氏らを中心に、そのコンテンツをどのように料理し展示・表現するか、試みに「絵コンテ」を作成してみる方向で進行している。

現時点で、プログラムの具体像はまだ明確にはなっていないが、秋以降には徐々に全体像もみえてくるはずである。多くの会員の意欲的な参加によって、素晴らしい構想が立ち上がることを期待したい。

このところ、日本近代の歴史を振り返る機会に恵まれてあらためて思うことがある。明治期においても大正期や戦後の歴史においても、いくつかの分岐点があつて、あのときあの人物がもう少し頑張つてくれたら、歴史も違つていただろうにと残念に思うことが少なくない。現実にはその重要人物がテロで暗殺されたり、病气や過労で倒れてしまつたケースが多く痛惜に堪えない。また、海外の要因も大きく作用する、第一次大戦のような事件は思いがけない好景気をもたらし、その反動で深刻な不況をももたらす。また世界恐慌のような事件が大津波のように襲うこともある。その意味では歴史はかなり偶発的な要素で大きく変わるものだという感慨も否めない。

「もう一つの日本像」を求めて より真剣に知恵を出し合おう！

泉 三郎

しかし、何時の時代にも志高く誠実に「よき社会」を目指し、「間違いを正す」べく命を懸けて尽力してくれた人々がいる。そして、人間社会はそのお陰でジグザクながら、少しずつでも進歩しているのではなにかとの感想を抱く。科学

技術の進歩や経済産業の発展は申すまでもなくわれわれの生活を驚くほど豊かに便利にしてくれた。しかし、その一方で、余りにも格差があり、非人間的な生活強いられる人も多い。それにしても、核兵器は広島・長崎以来七十年、一発も使われていないし、世界的な経済恐慌、金融恐慌もなんとか回避して今日まで来ている。不備とはいえ国連や各種サミット会議がもたれて、なんとかその危機を回避してきたからであろう。今、日本はパワーポリテイクスの世界に舞い戻るのか、平和憲法に依拠して非戦の路線を貫くかの岐路にあるといわれている。しかし、その二者択一ではなく、「もう一つの道」が日本にはあつていいのではないか。当会の二十周年記念シンポジウムでは、東西文明の双方を自家薬療中にしてきた日本から、この地球時代にふさわしい「第三の思想やヴィジョン」が紡ぎ出せないか、そのためにより真剣に、より深い知恵をあつめることができなにか、そんな夢を抱いている。

第75回 全体例会

定例年次総会開催
活発な部会活動を背景に
設立二十周年記念事業に向けた全体像を確認

四月二十六日、一ツ橋の学術総合センターにおいて、NPO法人としての定例年次総会が開催された。出席者三十名、委任状五十二通で成立した第一部の総会は、近藤義彦理事の進行で進められ、泉三郎代表(理事長)の挨拶、近藤事務局長による平成二十六年年度の会計収支報告、西田親行監事の監査報告、平成二十七年年度予算案の説明があり、拍手をもって予算案が承認された。その後、担当幹事(敬称略)によって、「実記を読む会」小坂田國雄、「英訳実記を読む会」(サトウ輪読会)「岩崎洋三」、「歴史部会」小野博正、「グローバル



定例年次総会第2部 (学術総合センター)

ル・ジャパン研究会」島山朔男、「メディア委員会」中山進。そして、岩崎洋三・植木園子による「i-cafe」の報告があった。

*欠席の会員は、年次総会後送付された会計収支報告、予算案、役員一覧、活動報告、活動計画を参照下さい。

休憩後、第二部として、今年度の活動計画の概要と設立二十周年記念事業についての企画説明と討論が行われた。まず、泉代表が、全体の見取り図として、活動を、各部会による「通常活動」、「i-cafe、アーカイブ充実やメディア戦略の「特別活動」、そして、「記念事業プロジェクト」の三つに分類・整理して示した。(下記参照)

その上で、記念事業として「グランドシンポジウム&セミナー」企画と、「ヴァーチャルミュージアム」構想が泉代表から発表され、本年度の二つの準備セミナーの計画が山田顧問と小野幹事から補足説明された。熱心な質疑応答が続き、終了後は、第三部の懇親会となった。

進行および会計収支報告 (近藤事務局長)



セミナーについての状況報告
A小野氏(左) B山田氏(右)

□活動計画の概要

〔通常活動〕

- 一. 実記を読む会
- 二. 英訳実記を読む会
- 三. 歴史部会
- 四. グローバルジャパン研究会
- 五. メディア委員会 (ニュースの刊行、マンスリーブレチン、フェイスブック)

〔特別活動〕

- 一. 「知らせる・会員拡大」(i-cafe委員会)
- 二. アーカイブ充実 (読む会・歴史部会)
- 三. Lecture用コンテンツ、人物評伝、歴史資料他
- 三. メディア戦略 (ITメディア委員会)

ホームページ充実、ミュージアム構想

一. 記念事業プロジェクト) & セミナー

- A. 岩倉使節団とは何だったのか(総括) .. 人物を通じて
- B. 日本近代の成功と失敗 .. 人物を通じて

- C. 新しい理念とヴィジョンを探る .. 日本社会への提言
- 二. 岩倉使節団ミュージアム (本年度は準備段階) コンテンツづくり 編集作業

岩倉使節団・米欧回覧実記を広く知らせ、会員拡大につなげる活発な活動

昨年五月、岩崎、植木幹事が中心となって「i-cafe-music」映像と音楽で巡る「岩倉使節団・米欧回覧の旅」が開催された。その後も会場・企画を変えて各所で実施され、全ての催事が盛況、そして、これを契機に会員になる方も多い。今年も、次々と開催・計画されている。

- ①多田直彦幹事が地元で開催した「i-cafe-lecture@新浦安」映像でたどる岩倉使節団・世界一周632日の旅(1871~1873) (四月十九日)



満席の浦安市民プラザ (4月19日・新浦安)

- ②習志野の音楽空間・リンデンバウムのご協力を得て大盛

況の「i-cafe-music」(五月十日)「映像でたどる岩倉使節団・世界一周632日の旅」



(5月10日・リンデンバウム) チラシのイラスト(右)は会員のゆうきよしなり氏作



③「i-cafe-music@シェア奥沢 Part II

「映像と音楽でたどる岩倉使節団・最初の訪問国アメリカ七カ月の旅」(五月二十四日) 「映像と音楽でたどる岩倉使節団・アメリカ篇IIワシントン滞在と東部回覧」(七月十九日)

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方の自己紹介です。

石倉 美治

会社の先輩にこの会をご紹介いただき、先人の「苦難の足跡」を勉強してみたくなり入会することといたしました。現役のサラリーマンですので、平日のセミナーには参加することが難しいのですが、土日に機動力を生かして現場を見たり、資料を発掘して行きたいと考えています。特に今年医大を卒業した長男の嫁が中江兆民先生と縁があるので、まずは中江先生の足跡を研究していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

大槻 結子

二〇一三年八月、五十年間の会社を卒業、翌九月から早稲田エクステンションセンターで学んで居ます。そこでの友のピンチヒッターで泉先生の講座を受講。すっかり虜になりました。当に瓢箪から駒お恥ずかし乍、明治新政府樹立当時の事は無知で、林望著『スチューデント、西へ』が記憶に残っている程度の情けなさです。喜寿の手習いですが学ばずに遅きはないと、鈍い頭をフル回転させております。宜しくお願い致します。



実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第百九十一回

三月十二日開催

『第8巻リヨンとマルセイユ市の記』

リヨンは絹織物の名産地である。ヨーロッパの養蚕業は、ローマ時代に始まった。桑の木は寒帯に近いようなどころには生育しない。ヨーロッパでも南部の温暖な地域ではよく生育するので南ヨーロッパに位置した国々はみな養蚕業を心掛けた。

ところが、1854・5年頃から蚕に疫病が流行して、養蚕業が衰え、絹織物の価格が高騰した。そこで中国の湖南、湖北両省から生糸を、また日本からは蚕種を特別価格で買入れ、その衰退を防いでいたが、最近蚕の病気を克服し、繭や糸の生産量が回復したのみならず、さらに盛んになっていく傾向を見せている。

マルセイユ港がヨーロッパ第一の港湾であることは、人口、船の数からも知ることが出来る。フランスでも大都市なので、博物館、歴史博物館、美術館、病院、学校、福祉施設などがあり、図書館には五万冊の蔵書がある。『第8巻イスパニア、ポルト

ガル略記』

スペインとポルトガルの歴史を概説している。しかし、久米の記述は正確性に欠けるので、『Bガイドブック』の資料を参加者に配布した。

使節団は、マルセイユから一路日本に向かった。そこで、次の項目のプレゼンを行った。

『岩倉使節団の留守中に日本で何が起こっていたか』

使節団の派遣はもともと大隈の計画であって、彼自身が使節の任に当たり、実力者木戸や大久保は留まって内政の推進に当たるはずだった。大久保と木戸が長期間政府を留守にするということには不安もあった。そこで大久保は「留守政府」を西郷に託し、板垣をも説得した。

岩倉らの出発に際して、使節団首脳と西郷政府とのあいだには、十二項目にわたる「約定書」が結ばれ、重要政策、重要人事はなるべくおこなわず、やむをえない場合には、岩倉使節団と相談のうえにきめることとされていた。しかし、廃藩置県後の政局は多くの重要な問題をかかえていたから、「約定」は実際には守られていない。守られていないどころか、「留守政府」のもとで学制改革や地租改正、徴兵令の施行や身分制改革、陰曆に代わる太陽曆の採

用から国立銀行条例の公布等、枚挙にいとまのない改革の実施である。

(小坂田 國雄)

■第百九十二回

四月九日開催、参加者九名、第8巻ヨーロッパ州政治論、第9巻ヨーロッパ州地理及び運漕総論

8巻は、久米がヨーロッパの政治・社会論を展開。まずヨーロッパの「保護政治」と東アジアの「道徳政治」を比較し、人種風俗、社会の仕来りにより国々が分れ政治の違いを生じ、人々の政治精神が非常に異なること。次に国境が生ずる要因として欧州には複雑な山脈や国際河川など地理的要素があるほか、多様な人種・民族の別をあげ、白人種、黄色など東洋人と欧州人を対比して論じるが、かなり偏見が混じる。しかし、欧州の政治が民族の自由を尊重していることは甚だ貴重であるとしてほかに、人種の別により婚姻、言語、宗教の三権が生じ緊要の事柄であるとす

る。また当時の欧州諸国の政体が各王侯の婚姻関係によつて大きく決定されていることにも言及。

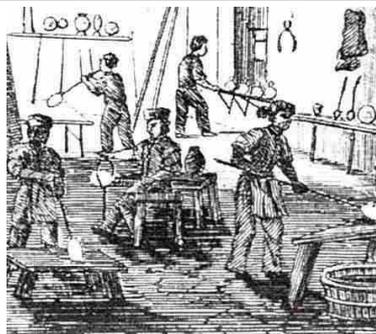
さらにフランス識者の説明を受けヨーロッパの政治体制と共和制があり、さらに圧政、専治、立憲、連合、盟

約、デモクラシーに分れ多様なこと。そして欧州の政治は東洋の政治と全く別種であり、欧州には会社(=結社)団結の気風があり、これは東洋にない指摘。欧州の政治・社会を詳細に分析すると、大きくは一国の政治から州・県・町・村の各レベルにも会社の性質が結晶しているとする。さらに欧州政治の要諦として「ジャスチス」(正義)と「ソサイエティ」(社会)との関係を見ることが大事だとする。

なお、今回の報告では、久米の欧州政治論を学ぶとともに、過去において戦乱に明け暮れたヨーロッパ社会が新たにEU世界を誕生させるに至った政治状況について、ドイツとフランスの政治史を中心に欧州政治全体を『ヨーロッパのデモクラシー』(網谷龍介他編、ナカニシヤ出版)によって要約紹介し、理解を深めた。

8巻のヨーロッパの地理と運輸では、(1)臨海部と山間部の工業生産・交通(2)河川・湖と運輸、水路・鉄道及びエネルギー論を展開。報告ではローマ時代の「ローマ帝国主要道路」に欧州のインフラ基盤が形成されてきたことを学ぶ。

(大森 東亜)



ガラス工場の光景 (銅版画)

『(実記を読む会報告続き) 第九十三回』五月十四日開催。

『第91巻』ヨーロッパ州気候と農業総論』緯度との関係でみれば、他の諸州と比較してずっと温和である。イスパニア、イタリア、トルコ、およびロシアの南部においては、気候も産物も熱帯国に近い。ロシアのサンクト・ペテルブルグは北緯六十度に近い高緯度にあるが、夏は英国より暑い。ノルウェーでは北緯七十度のあたりまで農業が可能である。これらを我が国の北海道の気候と比べれば、違いは大きい。

農業の第一は穀物であり、小麦が最も貴重である。第二は、貿易用の穀物以外の食品で、嗜好用の、砂糖、タバコ、茶のたぐいである。第三は、醸造品。第四は、繊維製品の原料である。第五は、染料、媒染剤。第六は、油の原料で、その最大の作物は菜種

である。菜種油はまず灯火として用い、次いで機械の潤滑油として使う。

『第92巻』ヨーロッパ州鉱・工業総論』石炭は、鉱産物の中で最も大きく利益に貢献し、鉄鉱石は石炭に次いで利益が大きい。英国のロンドンはその大市場である。

『第93巻』ヨーロッパ州商業総論』商業のことをヨーロッパの経済学者は物産を流通させる仕事だと規定している。

各国の歴訪は、他でもない、日本との交際がもっと親しくなり、貿易が盛んになることを望むからこそである。そこで、各国の元首と会っても、外務官庁の人々と会っても、交わす言葉は「親睦と貿易」の二つに尽きた。

全世界で主要な貿易品は工業製品ではなく、穀類、酒類、砂糖、タバコ、茶・コーヒー、綿花、羊毛、麻類、生糸、鉄。

『第一次産業革命中の欧州視察』使節団の見たヨーロッパは、蒸気機関(外燃機関)と水力、それに石炭ファーンエスの普及による産業革命の第一次完成期であって、紡織産業と鉄道がそのシンボルであった。電力利用はまだほんの端緒に就いたばかりだし、内燃機関の登場もしばらく待たねばならない。合理的生産ラインも、紡織、製紙、製鉄など

の一部にだけ見られた。ほんとうに大きな工業的飛躍が怒涛のように始まるのは、発電機とモーター、そして内燃機関の普及を待たねばならず、機械の性質もそれにつれてさらに複雑になり、あらゆる生産現場で近代的生産ラインが形成されていく。それは、久米達の旅の約十年後からのことである。現在は、第四次産業革命が起ころうとしているので、これまでの産業革命の歩みを振り返ってみたい。(小坂田 國雄)

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事 岩崎洋三
Tel 080-7959-4332
iwasakiyz1116@gmail.com

『Murder of Bird and Baldwin』四月十八日開催、Ch.12 The 砲撃事件をリードして勝利した英国公使オールコックが、予期に反して本国召還となったことと、その直前に降って湧いた鎌倉でピクニック中の英国軍人二名が殺された事件を描いている。

攘夷派の長州藩は、幕命により攘夷実行日とされた文久三年五月十日に率先して関門海峡航行中の外国船を砲撃した。オールコックはこれに對抗して、仏蘭米と連携して下関戦争を仕掛け、急先鋒長州藩を屈服させた。しかし本国外務大臣ラッセル卿の戦争回避命令に反した形になり本国召還(実質更迭)されてしま

『Murder of Bird and Baldwin』四月十八日開催、Ch.12 The 砲撃事件をリードして勝利した英国公使オールコックが、予期に反して本国召還となったことと、その直前に降って湧いた鎌倉でピクニック中の英国軍人二名が殺された事件を描いている。

『Ratification of The Treaties By The Mikado』四月十五日開催、Ch.13 サトウの眼を通じて幕末の

その帰国直前に、横浜駐留の英国陸軍軍人ポールドウィン少佐とバード中尉が、休暇で鎌倉を訪問中に二人の武士に殺傷された事件(鎌倉事件)が発生した。オールコックは帰国時までの犯人逮捕と処刑、処刑現場への英軍士官立会いを強く求めた。サトウは斬首場面を異常に細かく描写しているが、もろもろの外国人殺傷事件で、これが犯人が逮捕され処罰された始めてのケースとなった。(岩崎 洋三)

『Great Fire at Yokohama』五月二十日開催、Ch.14: 横浜に帰ったSatowは直ちに江戸へ行き兵庫で約束した条

内外の様子を見ることが出来て興味深い。

(1) 条約改訂を迫る英米蘭仏とそれを引き延ばし鎖国を守ろうとする幕府との間で繰り広げられる駆引き。(2) パークス・サトウ(英)とロシュ・メルメ(仏)を軸とする英仏間の確執、お互いの対立や出し抜き。(3) 天皇を中心とする公家と將軍を中心とする武士との間での主導権争い。(4) 雄藩内での開国派・攘夷派、雄藩間また雄藩と徳川との間等での対立や腹の探り合いや思惑を秘めたやり取りや互いの行動振り。

(5) 諸外国に対する、恐怖感が強い公家・武士階層と興味を示しどちらかといえば親愛的な一般庶民の対応の様子の相違。等々。

そして最後に英語・日本語間での解釈の相違の問題として“The treaties are sanctioned” “Treaties are sanctioned” “the”の有無が本場に幕府が仕組んだのかそれとも単なる偶然か、全く違った観点からの議論も面白そうであったが、これは時間切れとなってしまった。(成田 八郎)

内外の様子を見ることが出来て興味深い。

(1) 条約改訂を迫る英米蘭仏とそれを引き延ばし鎖国を守ろうとする幕府との間で繰り広げられる駆引き。(2) パークス・サトウ(英)とロシュ・メルメ(仏)を軸とする英仏間の確執、お互いの対立や出し抜き。(3) 天皇を中心とする公家と將軍を中心とする武士との間での主導権争い。(4) 雄藩内での開国派・攘夷派、雄藩間また雄藩と徳川との間等での対立や腹の探り合いや思惑を秘めたやり取りや互いの行動振り。

(5) 諸外国に対する、恐怖感が強い公家・武士階層と興味を示しどちらかといえば親愛的な一般庶民の対応の様子の相違。等々。

そして最後に英語・日本語間での解釈の相違の問題として“The treaties are sanctioned” “Treaties are sanctioned” “the”の有無が本場に幕府が仕組んだのかそれとも単なる偶然か、全く違った観点からの議論も面白そうであったが、これは時間切れとなってしまった。(成田 八郎)

約と協約に対する反応を探ったが、その内容はまだ江戸に届いていなかった。

兵庫の開港要求に幕府から早期回答がなければ、列強は京都御所でミカドと直接交渉すると通告した。交渉役の阿部豊後守、松前伊豆守はこの行為は幕府の崩壊となると見て、無勅許で開港を決めた。これを朝廷は咎めて両名の官位を剥奪し、改易とした(1865.11.17)。

日本語に習熟を重ねたSatomは大名の家来等との交友を深め、よく論議を交わす。これが英国公使館の重要な情報源となる。この時点での列強側は日本国全体の支配者がミカドであるのか、幕府であるのか明確に見極めきれず、条約の締結を迫る相手を特定できていない。

ハリー卿は兵庫の協定に基づき関税率の改正に着手し、列強は早くも1866.6.25老中と安政五か国条約付属貿易章程の改訂協約である改稅約書を調印した。

これらは、領事裁判権を認める、関税自主権がない、などを内容としたが、この「不平等性」は幕末には大事と見做されず、問題になったのは明治維新以降である。

この調印を境として、輸入品価格のさえないし、であった従価税方式の関税が、四年間

の物価平均で決める原価の一律5%を基準とした従量税方式に改訂された。これは、物価の上昇(インフレ)に即応しない安価な外国商品の大量流入、国際貿易の不均衡化、産業資本発達の著しい阻害を招いた。この調印が日本に与えた影響は甚大であったが、Satomの日記では一行の言及のみで片づけられている。

ジャパンタイムズと懇意になり、政治問題の寄稿を始め、「英国策論」なる小冊子を作成した。この写本が諸大名の家に広まる。

1866.11.26横浜に大火発生。運上所、改所、役所など日本人町の多くと居留地のほとんどを四日間にわたって焼き尽くした。Satomも焼け出されて、外国人百七名が宿無しとなった。(市川 三世史)

歴史部会報

担当幹事 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp



原田一道、吉川重吉、そして毛利家(講師: 穴戸旦氏)

三月十六日開催、出席者十六名

米欧亜回覧の会の二十周年記念行事のひとつに、使節団を巡る群像の人物論が挙がっている

川重吉、毛利元敏の三人が

る。

その三人と家系上に繋がりを。その三人が講師の穴戸旦氏である。祖先となる穴戸磯は安田直温の三男に生まれ、幼名辰之助、のち子誠、敬宇と称す。吉田松陰とともに玉木文之進(松下村塾)と藩校明倫館に学び、1868年藩儒・山縣大華の養子となり、山縣半蔵を称す。幕府役人の村垣範正に従い、蝦夷地、樺太、露国巡視に参加、後には長崎遊学で諸藩士と交流する。帰国しては世子・毛利定広(のち元徳)の侍講となり、定広に従い江戸へ赴き国事に奔走する。佐久間象山を長州に招聘せんと久坂玄瑞と松代を訪れ、招聘は失敗するが国際情勢や国防論の薫陶を受ける。

その後、尊皇攘夷運動に邁進し、禁門の変、四国連合艦隊来襲などを切り抜け、家老・穴戸家の養子となって穴戸備後助と改名し、幕府問罪使・永井尚志との応接にあたるなどの活躍をして、維新後には、山口藩権大参事、刑部少輔、司法大輔、文部大輔、元老院議員、清国駐劄全権大使、子爵、貴族院議員などを務める。

原田一道は幕臣として出発し、蕃所調書出仕、池田遣使使節団随員、オランダ陸軍士官学校に学び、維新後山田頭義理事官の随員として岩倉

使節団に参加、仏、蘭など欧州各国を巡遊し、帰国後陸軍少将に進み、兵学校大教授として、桂太郎、寺内正毅、長谷川好道、乃木希典などを育てている。貴族院議員、元老院議員など歴任して男爵、勲一等旭日大授章を受けている。

原田一道の孫・原田熊雄は西園寺公望の秘書で男爵、原田文書で著名であるが、その娘・智恵子が穴戸旦氏の母親である。その智恵子の母親は、吉川重吉の娘・英子という関係。吉川重吉は岩国藩主・吉川経幹の三男として生まれ、十三歳で岩倉使節団の留学生として参加、在米十二年でハーバード大学を卒業し帰国。外務省に入り、ベルリン公使館勤務後、官を辞し、ハイデルベルヒ大学に遊学するが、帰国後分家を立て男爵を授爵、貴族院議員を務めながら、ハーバード大学に日本文化講座を開設、南洋協会副会頭を務める。

私費留学で岩倉使節団に参加した毛利元敏は長門長府藩最後の藩主である。尚、吉川重吉は毛利敬親の猶子となったので、重吉を曾祖父とする穴戸氏は毛利家とも系譜を共にすることになる。使節団の一翼を担った華麗な家系といえるべきだろう。

(文責) 小野 博正

思想家・石橋湛山―「小日本」の思想的意味

四月二十日開催。

石橋湛山については、思想面からのアプローチに絞り湛山の文芸記者時代の言論を扱うことで、経済記者および政治家時代に貫かれた小日本主義者としての(1) 文明論的視野の広さ、(2) アメリカ・プラグマティズムと進化論の関係から導かれた、個人と社会を一元的に捉えバランスを重視する「欲望統整」の哲学、(3) 普遍性を希求する「真」の思想、これらが基礎となつて「小日本主義」思想が成り立っていることを紐解いていく。そして、リアリストでありリベラリストの思想家・湛山の一端を試みる。

小日本主義思想はイギリス型国家を目指した、東洋経済新報社第三代主幹の植松考昭から三浦鍊太郎、湛山へと受け継がれた。湛山は国内外において徹底した小日本主義を主張し、その基礎には「個人は社会のなかで他者と共に生活を営み生きていくことか、個人と社会、個人と他者はバラバラに存在するのではなく一元を為すものであり、相互作用の関係にある」、 「個人の発展は社会の発展に繋がりに、私益の増進は公益の増進に通じる」という考え方がある。(六頁に続く)

これが「欲望統整」論である。人間は、個人の多様な欲望を他者との関係、社会との関係から制御し統制すると共に、個人の可能性が開化し自己実現へ向かうよう社会を改造する存在である。湛山にとつて、個人—国家(日本)—世界(国際社会)は並列のものとして意識されていた。そこには国家も国際社会も人間が創り動かすものとの認識が窺える。

もう一つは、早くからの文明的知見である。湛山は、産業革命に成功し近代化をいち早く成し遂げたイギリスが行き詰まっっていく様子を具に目の当たりにした。「永遠なる自由競争は人々に幸福をもたらさぬ」とこれが彼の見出した教訓である。だからこそ、生活に重心を据えた「真」の思想すなわち新しい自由主義哲学の樹立を急いだ。

具体的にはイギリスのNew Liberalism哲学を範としながら、1910年代には「対米移民不要論」「普通選挙論」を主張し、ロシア、中国に対しては民族意識を尊重するがためにシベリア出兵反対、ロシア革命および辛亥革命にはエールを送った。そして1920年からは、緊縮財政へ向かう政府に対し「労力は富なり」の視点から「人中心の産業革命」を唱え、次男を戦死させなが

らも、それを使命として幸福な社会のために闘い抜いた真に平和の求道者である。

湛山の「小日本」の孤高を貫く姿勢は戦前も戦後も鋭い言説として変わらぬ。こうした湛山の存在は論調とともに今もなお語り継がれることが多く、その輝きは消え失せていない。(小松 優香)

■明治維新を巡る豪商たち

五月十八日開催

明治維新のような大きな国家改革、事業を達成するためには、想像を絶する資金が必要。この課題の歴史的考察は少ないように思う。私なりに歴史調査をして日本全国、世界各国を歩いて入手した情報をもとに報告した。また、伊勢出身なので伊勢との関わりを意識して纏めてみた。

海商たちがいち早く異国情報入手、河村瑞賢による北方航路の発見、確立から北前船への時代、大黒屋光太夫、高田屋嘉兵衛による異国文化情報の日本への導入が発端となり、封建制度への疑問、鎖国の無意味さ、開国必然性の認識が高まり、明治維新に進んだ。そこには竹川竹斎が勝海舟のブレインとして活躍した。薩摩、長州の資金源を蓄財した浜崎太平治、白石正一郎の活躍を考証した。島津斉彬があればだけの資金を使つて西洋文明を取り入れ、討幕の

端緒を開いた裏方には調所笑左衛門が起用した浜崎太平治という海商がいた。

高杉晋作が武士のみに頼らず奇兵隊を結成、その経済的支援は白石正一郎が務め、坂本龍馬、小栗上野介を経済人として捉えた。小栗の夢見た兵庫商社構想は興味深い。成功しなかった。坂本龍馬などは脱藩者で組織した海援隊の資金は藩から調達するといふ離れ業を成功させ、いろいろ丸事件でも手腕を発揮した。

渡沢栄一は、パリ万国への参加から西洋事情に接し、株式会社認識を手に入れ、国立銀行設立、諸産業設立の機運を開いた。箱館戦争を起こした榎本武揚が蝦夷地に新国家設立という夢を描いたことに代表されるように、当時の憧れの地蝦夷地に北海道という命名を行った伊勢出身の松浦武四郎について語り、締めくくった。(西井 易穂)

■歴史認識について

三月十四日開催

米国人は、明らかに親切だが、国益の為に何をもする。グローバルの時代とは、この様な中で、どう生き

残るかが求められる。

日清、日露戦争は、自衛の戦争であったが、以後、日本は、半周遅れの帝国主義の道を進んだ。日韓併合は、植民地化といえるが、欧米も承認し、朝鮮内にも、同調者はいた。放置すれば、ロシアが進出し、それは、日本として、容認できなかった。慰安婦問題、徴用問題、賠償問題等には、曲解があり、事実に基づいて、公正に判断すべきだ。

満洲事変は、既得権益の保護と、侵略の両面があった。日中戦争は、国際的な謀略もあつたが、中国に多大の損害を与えた以上、侵略戦争といわざるを得ない。

太平洋戦争は、太平洋の覇権と、中国の市場を巡る日米の相克を背景に、成り行き戦争であった。東京裁判は、政治決着と理解すべき。靖国問題では、A級戦犯は分祀しの方が良い。

国家には、統治機関としての国家と、祖国としての国家がある。前者は、国民の生命、財産を守ってもらう互助組合の様なものであり、後者は愛国心の対象である。国家に主権がある以上、国連には強制力において限界がある。

戦争の根源は、『食と安全保障の確保』にある。戦争は、政治の延長で、最後は力が解決する。戦争の形態には



コンコルド広場 (銅版画)

『侵略、防衛、国際貢献』があり、憲法では、侵略のみを禁止すればよい。

『これからの課題』

- (1) 歴史について、事実に基づいた公正な総括を行い、謝るべきは謝り、言うべきことは言う。(2) 自存自立の国家を目指す。(3) 国際環境の変化に即し、憲法、安保条約を見直す。(4) リスクを取り、自ら判断し、結果に責任を負う、個を確立した国民を作る。最後に、多様性を受け入れ、経済、文化、平和維持活動等で、積極的な国際貢献を行う。(横内 則之)

■日本の難局をどう乗り切るか—国内課題と対外関係—

四月十一日開催

第一編「新成長時代をどう乗り切るか」
国内の社会経済について現在の発展段階を「新成熟時代の到来」と規定し、「未踏社会」と名づけた。そして日本の社会経済システムはこの大

転換期を支えていけるか、につき社会の在り様、産業経済の特質、企業経営の実力、イノベーションの展望、の四つの観点から評価した。結論は、日本が保持している力量は高く、当分はこの蓄積によって国内は瓦解していくという懸念はもつ必要はないことであった。

これで充分というのではない。①グローバル時代にあつては、アジアに強力な立脚点を作る②企業のグローバル化展開を成功させる③日本の得意とする「ミドル技術」を武器に世界各地の発展に寄与する、ことが求められる。また国内では新しい社会統合体の形成にむけて①社会指導層の形成の為に日本版「新貴族集団」をつくること②「官」と「民」の間に新公共空間をつくることを指摘した。

これらの課題をかかえつつ、日本は蓄積した成果に今後とも安住できるかを考えなければならぬ。それは(一)国際収支における経常黒字の維持への不安であり、エネルギー自立度の達成、具体的に原子力発電をどこまで許容するかの問題である。(二)は大幅な財政赤字への対処であるが赤字財政は「擬似完全雇用」を齎しているのだから、これを圧縮することは社会の各層に完全雇用を維持で

きず、生活不安を齎すものとなる。この問題の本格的展開はつぎの主テーマになる。第二編「対外関係の再設計」

提案は①日米安保条約の再検討と新安保の締結②東アジアの新事態に対処する安保地域協定の見直し「アジア・太平洋地域」の明確化③日米間で結ばれている日本の基地協定を条約に格上げすることの三点である。基本認識は冷戦後の新しい世界秩序の模索のなかで、米国の影響力は下り日本の対米従属度ははじめて低下してきた、という力関係の変化である。また米国側でも現在の軍備のあり方を再検討する必要ありとの声が上がった(「日経新聞」五月三十一日)。これはチャンスであり、日本の安全保障体系全体の再構築を進めねばならない。(吹田尚一)

■科学とメルヘン

五月九日開催。

「科学とメルヘン」は、科学をテーマに描いたメルヘン画のシリーズである。宇宙開発からナノテクノロジーまで、科学の面白さを絵と詩で表現している。

例えば、JAXAが開発した世界初の宇宙ヨットを「恋する気持ちを抑えられず心臓が地球を飛び出して宇宙を航海するふたり」の絵にしたり、地球の周りのスペースデブリの間

題を「デブリの弾丸に囲まれながらみんなの暮らしの安心を祈る青いヴェールの女の子」の絵にしたり、ナノ・テクノロジーにおける摩擦に関する研究を「一見スベスベだけれど実はデコボコのヤモリ婦人の肌」や「ナノ球で転がる摩擦の少ないバス」の絵にしたり、この細胞によって作られた赤血球を「奇術師の差した赤い花束」の絵にした、といった具合に、難解な数式や専門用語を使わずに感性で楽しめる形にしている。

「科学とメルヘン」には、実際に研究者に取材した話をもとに構想し、制作している作品が多数ある。科学研究の最前線では、とてもわくわくすることがたくさん起こっている。夢のようなことが絵空事ではなく現実のものとなっている。作品を通してこれらのドラマ、面白さ、問題点などをより多くの人に感じてもらいたい、興味を深めてもらいたい、議論するきっかけになればと思う。

明治維新の時代、日本は欧米の国々から科学的な知識や技術を多く取り入れた。そして、それから百年以上を経た現在に至るまで、それらを育て、堆積させ、今では様々な分野で世界最先端の技術を開発して世界に貢献している。理科や数学が好きな子ども

たちが増え、変遷するこれからの時代を創意工夫をもって航海し、希望あふれる未来に向けて帆をいっぱい広げてほしいと願っている。(ゆうきよしなり)

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第八十回例会
三月十五日開催、参加九名。

今回は指昭博(さしあきひろ)神戸外国大学教授に講演を行って頂いた。同教授は大阪大学文学部史学科出身で、京都大学出身の英国史研究の第一人者である川北稔教授のもとで英国の中世から近世の社会構造を専門に研究された。

これからの日本にとって、この斜陽でありながら沈まない英国たらしめているもの、本質を知ることが大いに意義があり、英国の歴史からもそれを知りたいと考え、「四十年の遅れを追いかけてイギリスへの眼差しの変遷」を題目とした講演をお願いした。一、手本としてのイギリス：福沢諭吉、久米邦武。二、個人としての視線でのイギリス：漱石、長谷川如是閑、浦松嘉一。三、イギリスへの同情、憐憫(戦後の日本への高度成長、英国病)：福原



ヴェルサイユ宮殿 (銅版画)

隣太郎。四、英国病から立ち直った英国、サッチャリズム：経済関係ジャーナリスト、但し、金融依存経済構造の是非。五、まとめ。

■第八十一回例会

四月二十五日開催、参加四名。第三巻フランス編。

煤煙のロンドンから華のパリに移動してきた使節団一行は、パリの華やかさに圧倒されて、颯爽と立ち並ぶ建物や、都市空間にゆとりを与える広場と安らぎをもたらす公園など見学する。パリでは全市民が一つの公園内に住んでいるようである。空気は澄んでいて煤煙は少ない。石炭の代わりに薪を使っているからである。「ロンドン人は人を努力させる都市であるが、パリは人を楽しませる都市である」とパリにすっかり魅了されている。

後半は、現実世界の厳しい状況である、中国の南沙諸島進出行動を歴史から見てどのように捉えるべきか話し合った。(難波 康熙)

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295
- 入会申込**
入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります
<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2015年 7月～9月の予定です

☆7月全体例会

日時：7月26日(日) 13:30～16:00 (開場13時)
例会：13:30～14:00
講演：芳賀徹先生
「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」について
14:30～16:00 (17:00から懇親会を予定)
場所：学術総合センター会議室(千代田区一ツ橋)
会費：2,000円(懇親会5,000円)

☆実記を読む会

日程：7月9日(木) 堀江氏「第95、96巻」
9月10日(木) 岩崎氏「第97巻」
時間：14:00～
場所：国際文化会館401号室(会費：1,000円)

☆Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会

日程：7月15日(水) 14:00～ Ch. 16 岩崎氏担当
9月15日(火) 14:00～ Ch. 17 小坂田氏担当
10月21日(水) 14:00～ Ch. 18 小泉氏担当
場所：日比谷図書文化館セミナールーム
会費：1,000円

☆歴史部会

日程：9月14日(月) 13:30～16:30
「近代医学への道と長与専斎」(西井易穂氏)
10月19日(月) 13:30～16:30
「大久保利通の考えたこの国のかたち」
(大平忠氏)
場所：国際文化会館404号室(会費：1,000円)

☆グローバルジャパン研究会

日程：7月11日(土)
テーマ：GJ研究会として再開後を振り返り今後の会の
有り方、勧め方、取り上げたいテーマ等
場所：国際文化会館401号室(会費：1,000円)

☆i-café-music @シェア奥沢 Part II

日程：7月19日(日) 14:00～16:30
テーマ：映像でたどる岩倉使節団 アメリカ篇II
ワシントン滞在と東部回覧
担当：岩崎氏、植木氏、畠山氏
場所：シェア奥沢
会費：2,000円

◇今号も部会報告が多数あり、少しづつ短縮し、報告文の途中で裏面への改頁もせざるを得ないほどで、収めるのに五頁近くを要し、部会活動が如何に活発化していることを示しています。回数ばかりでなく、設立二十周年記念事業を視野に入れた部会では参加者が三十名規模となり、新会員を含め気運の盛り上がりを感じます。

◇会員外の方に向けて、映像や音楽を媒介にして、岩倉使節団と米欧回覧実記を広く知らせ、関心を高める、工夫を凝らした小規模発信型の企画パッケージ(i-café)が定着してきました。さらに、記念事業プロジェクトとして、グランドシンポジウムの準備段階のセミナーBが三カ月で十回のペースで進行し、当会の活動は多角的かつ濃密となっております。当会の平均年齢を考えると、新しい会員の参画が不可欠となっております。

◇記念事業プロジェクトは、基本的に人物を通じたアプローチとなつていきます。そこで、今号の挿絵も、『実記』銅版画の一部に「人物」を拡大してみました。文庫版では殆ど見えませんが、探してみてください。三点とも第三巻の銅版画です。(N)

編集後記